

調査日 群馬県森林組合連合会共販所 2月5日

いよいよ2月に入った。ニッパチ月で2月と8月は物の売れ行きが停滞するとされる月だ。とは言え、木材の生産には一年中で一番良い季節でもある。

寒さが厳しく木が冬眠から覚める直前は、含水率が一年中で一番低く、年輪で言えば冬目と呼ばれる、いわゆる木目を形成する一番固い層が作られている時季になる。

買い方も、ニッパチの時季とは言え、今伐られた木を沢山ストックして夏場の虫害時期に備えたい所だ。今の時季に伐られた木は日持ちがするからだ。

しかし市場の入荷は極端に少ない。施業計画が公共の補助事業年度に支配され年度末に向けて、まとめの時季に入っているためと思われ、一年中で一番伐採に適した季節を逸して、一番伐ってはいけない時季に生産が多くなる傾向が強い。

今日の市を見ると、落札価格は横ばいか、欲目に見て少し強めに感じるが、注目すべきはその忘札枚数である。1物件に対して落札者は1名しかいない訳だが、その陰にはその材が欲しかった買い方が落札者の2~3倍は居た事になる。

価格が少し強めに感じたのは、1極辺りの総材積が少なかったためと思われる。

材積が少なければ、思い切って高めの札を入れても総金額は大きくならない。

であれば、「ここは強めの札を入れて落札してしまおう。少しでも多く確保しよう。」と言う事になる。買い方の大半がそう思い、その結果が忘札枚数に現れている。

もしこの時我が組合の出荷が多ければ、美味しい所を独り勝ちで頂けたであろう。

落札者の数に倍する買い方が、今の季節の材を欲しがっていたのが今回の市なのである。

しかしながら、この品薄需要は底が浅いと見ている。

ある程度の材が行き渡れば、減速に転じるのではないかと思う。

ここの所住宅需要は下がっている。インフレとまでは言わないが、昨今の諸物価の値上がりは、2024年問題に下支えされて、この先も高値が続くであろう不安に加えて農作物の不作が重なり、長年続いたデフレ傾向に慣れてしまった生活から見ると、キャベツが1個1,000円を超えるなど、住宅どころではない世情だ。

木材価格には反映しないが、住宅価格も1.5倍になっていると言う。県からの補助金も減り管柱が3寸5分角の住宅建設の現場をよく見かける様になった。管柱が5分つまり1.5cm細くなるという事は、土台から梁・桁に至るまですべての材が1.5cm細くなるという事なのである。強度的には金具を多用して国の基準を満たしさえすれば問題ないし、出来上がれば柱なんか見えなくなる。そもそもお施主さんには3.5寸角と4寸角など見分けが付かない中で施工する仕事である。頑張っても4寸角を使っても”補助金は無し””お施主さんが評価してくれるのは太陽光発電や断熱性 更には住宅設備機器やデザイン”と言う中で、コストダウンのしわ寄せを木材に持ってくるのは自然の成り行きだろう。

こちらの市では、出荷者の多くが国有林の請負契約が完了して、ようやく自社の持山で生産を始めている。

底の浅い需要は、間もなく満たされて減速して行くだろう。この需要を追いかける様に今日の市は”梅花祭り”と銘打って行われた。

国有林や森林組合が年度末決算に向かって着陸態勢に入っているのに対し、こちらの出荷者はこれから国有林が新年度計画を立てて、7年度事業の請負入札が始まるまでの間に、自社が立木で買ってあった山の生産をする。県森連の報告にも書いたが今が木を伐る時季としては、一年中で一番良い時季である。この時季に伐られた丸太は含水率が低く、樹脂も強いので日持ちがする。カラマツなどは標高の高い場所で生育するので、特に樹脂が強くその為に年輪に隙間が出来てそこに樹脂(ヤニ)が溜まる。これを形状によって、”ヤニツボ”とか”ヤニスジ”とか言うが、これが木口に現れると、桎積をして1~2時間ほどで地面に溜まるほどのヤニが噴き出す。この場合は木目が剥離している訳だから、もちろん歓迎される状態ではない。

この傾向は、米松と呼ばれる”ダグラスファー”などには顕著にみられるが、こちらはヤニツボに限らず、普通の木肌からも汗をかくようにヤニを吹き出すのはご存じの方も多いただろう。国産材ではアカマツのヤニは量が多いので、それなりの用途が出来ている。燃やして書道の墨は最高級の使い方だが、その他天然ニスや半田付けのフラックスなどだ。経木に使うのも赤松だが、こちらは節を避けて使う長さに伐った物を水槽で茹でて樹脂を抜く。最近の人工乾燥技術では、窯に入れると最初に150℃程の蒸気で蒸しあげてこの樹脂を抜くそれから温度を下げて、徐々に芯材から水分を抜いて行く。強度は落ちるが、割れは出ない割れを出さないためには、芯材の方の収縮率を大きくしておく。窯から出たばかりの柱は、芯がヒビだらけだ。これを数日間外気に当てて冷ましている間に、自然の湿度を吸って芯割れも目立たなくはなる。こうする事で品質を均等化している訳だ。

但し、この製品は柱として仕上げた製品で柱以外に汎用性は無い。

また、”ホゾ”は表面を切り落として芯の部分が多くなる訳だが、”ホゾ”はもろくなるという。

話を”梅花祭り市”に戻すと、素生協の出荷者は自社の経済活動の為に立木でストックしてある山から生産してくる。

森林計画の中で植樹・撫育しその一環として、木材生産をするのとは、少し趣が違っている。

立木で買ってあった山に手が付いた結果、今回は広葉樹が多く出品されてきている。

これらはもちろん天然生であろうから、量は多くは無いが、樹種はまことに多彩である。

ほとんどが 1m³に満たない桎なので、思い切り張り込んでも、1本10,000円~20,000円程度の物だ。

買い方はそれぞれの使い道を考えながら札を入れる訳だが広葉樹は使い方が多彩である。

だから、入札単価の差は使い道によって開いているだろう。だが相変わらずケヤキはどうにもならない。

針葉樹に至っては、国有林は売りやすい所を確実に売っている。

一般材は561~570号の大径のマツは、白太には見事と言えるほどアオカビが入り、どうなるかと思っていたが、どうやら漂白して、マツのフリーボードになるらしい。その他は丸太のまま転売される様だ。

スギの3.0m・4.0m材は桎数こそ少ないが、皆大きな桎で、A材・B材・若齢材など一緒にして

長級と径級だけで仕分けをしたことが伺える。更に桎の材積が大きいが入札価格にプレーキ感はない。

かつては4寸角に適した寸面だった16~18cmが3.5寸角の需要の伸びによってまた売れ始めている。

14cmの使い道は角材用では無い様で、今の所は3.0mも4.0mも14cmの1目の仕訳けで売るしかない様;